

【講義メモ 4-1】 マングローブ



マングローブは、熱帯・亜熱帯地域の海岸や河口付近の海水と淡水が入り交じる潮間帯に生育するヒルギ科などの低木の総称です。したがって、マングローブという名前の木は存在しません。ヤシ科植物やシダ植物を合わせると、世界中に100種類以上あるといわれています。東南アジアに多く分布しており、もともと東南アジアにあったものが世界中に広まったのではないかとされています。

この写真では少しわかりにくいですが、地上部分の幹や枝から伸びる多くの支柱根や気根があるのが特徴で、海岸を固定し侵食を防止したり、水棲生物をはじめ多くの生物の生息場所にもなっています。こういった場所は汽水域であり水に塩分が含まれているわけですが、塩分を根で濾過し水分のみを吸収するもの、塩分のみを葉の特殊な器官から蒸散させるもの、塩分を特定の葉に蓄積させてから葉を落とすものなど、さまざまな方法で塩分を処理しています。

ところで、1980年代後半以降、東南アジアを中心にこのマングローブ林の伐採が進行し、問題視

されています。薪炭材・建築材・パルプ材としての伐採のほか水田への転換など、さまざまな原因があげられますが、最大の要因はエビの養殖池への転換です。エビの養殖技術は日本で開発され、その後台湾からフィリピンへ、そしてインドネシア・タイ・マレーシアなどへと拡大していきました。東南アジアには養殖池がまたたく間に広がっていきましたが、5～10年で放棄されることが多いといわれています。食べ残された人工飼料や糞などの有機物の堆積で汚染されたり、病気予防や成長促進のための薬品投与などによって、次第に生産性が低下してゆくため放棄され、次々と新しい養殖池がつくられてゆきます。
